



TITLE:

信仰と理性：パスカル『キリスト教護教論』における<<sentiment>>の意義

AUTHOR(S):

山上, 浩嗣

CITATION:

山上, 浩嗣. 信仰と理性：パスカル『キリスト教護教論』における<<sentiment>>の意義. 仏文研究 1993, 24: 9-34

ISSUE DATE:

1993-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137806>

RIGHT:

信仰と理性

——パスカル『キリスト教護教論』における《sentiment》の意義——

山 上 浩 嗣

はじめに⁰⁾

『パンセ』において見られる『キリスト教護教論』（以下『護教論』）の試みは、キリスト教の真実性を納得させることによって信仰を正当化し、不信仰者を信仰へと促すことを目的としている。宗教の真実性を問題にする際に、それと「理性」との対立性をどう解決するかという問題が避けえない問題として生じてくる。このようなときにパスカルは、理性と両立できないことを前提に宗教の真実性を語る。すなわち、理性は無力であるから宗教の示す真理を認識することはできない、と。彼にあって信仰の正当性を示すことが理性の無力さを示す行為をもってなされたのであった。そして、信仰における直観的契機——ここでの《sentiment》——が必要となるのは、このような試みが同時に導く事態である。この契機は、真理の認識が「理性」に対しては拒まれていても、それとは別の手段によって人間に得られる可能性があることを示すための役割を担うのである。《sentiment》とは、このように理性的契機と対立的な価値を与えられた語であり、われわれのこの語への関心は主にそのような理性との対立性に発している。

信仰と理性との対立性はどのようにして解決されるのかという問題は、キリスト教精神を際立って特徴的に示すと思われる。本稿では、『キリスト教護教論』を試みるパスカルにこのアポリアがいかなるかたちで意識化されたか、また、果たしてそれが克服されえたかどうかを検証することを第一の目的とする。パスカルのこの試みはきわめて多くの逆説や矛盾に満ちた行為である。

『護教論』を遂行するうえでの困難を具体的に検討することを通じて、それが彼のいかなる信仰観を反映しているかについての考察をも適宜行う。

このような目的のために、ここでは2部に分けて論ずる。それは第1に、理性の無力さがどのように導き出され、それがパスカルのいかなる「理性」観を下敷きにしているかの考察、そして第2に、《sentiment》が必要とされるという事実が、『護教論』においていかなる意味をもつかの考察である。なお、「直観」「感情」など非理性的なはたらきを広く意味する《sentiment》という

語にただ一つの訳語を適用することは困難であるため、そのつど問題になる意味を見失わないように心がけながら、原則としてこの語を原語のまま用いることにする。

[1]「理性」の無力さ

(1) 人間の「理性」の無力さ

人間と神との間に存在論的差異を認めるパスカルにとって、人間の理性は「真理」を理解しえない無力なものである。ここでは、その理性の無力さが彼によってどのように説かれているかを見る。また、「理性」とはいかなる能力かの考察もあわせて行うことになる。あらかじめ言えば、われわれはパスカルの「理性」に、二つの異なった側面を指摘することができる。このことを確認し、彼の「理性」観と「信仰」がどのようなかかわりをもつかということについても整理しておきたい。

人間が善、正義をも含めた真理を知ることができない、ということはくり返し語られる¹⁾。人間の「真理」に対する無力さは、人間の「理性」のもつ能力や性質と関連があることは明白である。

[理性が理性的であったならおそらくそれで十分であろう。理性は、自分がこれまで何ひとつとして確実なものは見つけることができなかったと告白するほどには理性的である。しかし、理性はまだ確実なものにたどり着くことをあきらめていない。それどころか、理性はこの探究にこれまでにないほど熱心であり、自分のうちにこのことを克服するために必要な力があると確信している。

したがって、理性にとどめをささなければならない。理性の力をその結果において検討し、その後でその力をその力それ自体のうちに認めるようにしよう。理性が真理を理解するのに何らかの力や何らかの手掛かりをもっているかどうかを見てみよう]²⁾。

ここで言われるような理性の無力さは、「理性」という能力をはっきりと画定し、それと対象とのかかわりにおいて検証された事実ではない。おそらくは、人間が（真の）「真理」（正義・善）を理解できないという観察の事実から直接帰結された認識であるし、それすらも、人間の手にする真理が神の善たる本当の真理とは異なっているという判断が前提となっている。すなわち、人間が真理に到達できないのは「理性」が無力であるからである、ということになる。こうしたアブリオリな連関は、パスカルにおいて、「原罪」による人間の本性の墮落というアウグスティヌスの教説によって保証されている。

パスカルは、アウグスティヌスにしたがって、人間のなかに「二重性」(duplicité)を認める。人間は罪のない状態から墮落したので、そのときに享受していた真理や幸福を今では失ってしまったが、その影だけはもっている。そして、こうした墮落によって人間は神への愛を失い、被造物への愛に没入するようになる。すなわち、

感覚(sens)は理性から独立したばかりか、しばしば理性を支配するものとなり、理性を快楽の追求に駆り立てた。すべての被造物が人間を悩まし、人間を誘惑する⁹⁾。

ここで言われる被造物への愛は、神への愛(charité)とは対立的な概念であり、「邪欲」(concupiscence)と呼ばれる。墮落は主として人間の「意志」へと印され、それ以来、「意志」は「邪欲」によって動かされるようになったのである。人間においてはこれが「第二の本性」(seconde nature)となっており¹⁰⁾、これは人間を獣(bêtes)と同じ地位におとしめるものである。原罪による墮落という事態が、人間から神への愛を失わせ、「邪欲」の発生を引き起こす。人間は「理性」による「感覚」の支配を失い、「感覚」が「理性」を支配することになり、「理性」の本来的な働きを奪うのである。パスカルの言う「理性と情念(passions)の間の内なる戦い¹¹⁾」も同じことがらを示している。「情念」も「邪欲」同様、人間を獣の地位までおとしめる欲望である¹²⁾。

こうして、人間が真理を知らないのは情念や邪欲によって人間の「意志」が墮落してしまったという事実から説明される。邪欲はまず意志に宿るが、次に人間の存在全体を侵し始める。そこで、邪欲が人間の「精神」(esprit)の面での墮落の、ひいては善悪・真偽の正しい判断を妨げる盲目の間接的な原因になるのである。

このように、人間が真理を知らないのは、墮落による情念や邪欲の発生によって、それが理性と葛藤することから帰結する事態であって、理性そのものは本来的には正しく真理を把握できる能力であることが分かる。すなわち、理性が真理に対して無力であるという事態は、理性が他の要因によって妨げられることを示している。

パスカルにとって理性を妨げる要因は情念や邪欲だけではない。その最大のものとして「想像力」(imagination)がある。

想像力。

これこそ人間の支配的なあの部分であり、誤りと偽りの女主人である。そして、いつも人間を誤らせるとはかぎらないゆえにかえってたちが悪いのである。というのも、いつも偽りのまちがいのない基準となるならば、それはまた真理に対するまちがいのない基準ともなるだろうから。[……]私は愚かな人々について語っているのではない。最も賢明な人々について語っているのだ。想像力が人間に大きな説得力をもつのは、このような最も賢明な人々に

対してこそなのだ。いかに大声で叫んでも、理性にはものごとの価値を定めることはできない。

理性の敵であるこの驕り高ぶった力は、好んで理性を統御し、支配しようとする。この力は、そして、自分があらゆるものごとのうちにどれだけのことができるかを示そうとして、人間のうちに第2の本性をうち立てたのである⁷⁾。

理性が「ものごとの価値を定めることができない」のは、想像力のせいでその本来の働きを失ったからである。人間の誤りの原因は、したがって、想像力の存在であり、理性そのものに内在する不完全性ではない。理性は、想像力に対して「ついには一步を譲らざるをえない」という点で無力なのである。パスカルによる一例を挙げれば、身を置くには十分に広い板の上を歩く際に、両側に断崖を見下ろす場合には、世界一の哲学者でさえ色青ざめたり冷や汗をかいてしまう。これは、パスカルに即して言えば、理性が下す安全だという判断に対して、想像力が危険だと判断してしまうからである。パスカルにとって、理性が下す判断こそが正しいのであるが、人間にあってはどうしても想像力による判断が勝ってしまい、その判断によって納得させられてしまう。人間の真理に対する無力さはこの事態を指して言われる。つまり、理性の無力さとは、それによって下される正しい判断が人間に対して納得させる力をもたないという事実を示しているのである。

しかしここで、「理性が墮落している」とも言われていることに注目しなければならない。

このご立派な理性の墮落のおかげですべてが墮落してしまった⁸⁾。

単に理性だけによって判断すれば、それ自体正しいものは何もなく、すべては時とともに揺れ動く⁹⁾。

と言われるように、人間にとっての正義の変化性が「理性」そのものの不都合によるものとして説明されてもいる。人間の本性の墮落により、情念や邪欲が発生し、それによって理性の純粋な働きが抑制されているという事情は上で確認した。そして、「理性の無力さ」の原因は正確にこの事情に対応するものであった。この事態は厳密に言えば、「理性」そのものの「墮落」とは一致しないはずである。理性の無力さは本性の墮落に起因するとしても、このことは「理性」そのものの墮落とは異なるからである。

墮落した本性。

人間は理性によって行動していない。理性こそ人間の存在そのものをなすものであるの

に¹⁰⁾。

げんに、この断章では、パスカルが人間が理性によって行動できなくなっていることに「本性の墮落」を認めていることが示唆される。墮落しているのは決して「理性」ではないはずである。彼は「理性の墮落」と言う際に、「本性」を「理性」と同一視していると思われる。

さて、このような「本性」と「理性」の同一視ないし混同にはまた、理由があるように思われる。それは、パスカルの「理性」に対する認識に由来していると言える。

これまでのところでは、「理性」は妨げがなければ「正しい」判断を人間に与えることのできる能力とされていた。最高の哲学者が断崖を見下ろす板の上を歩くのに冷や汗をかくのは、安全だと判断する理性を妨げる想像力が働いたせいであつたし、豪華な衣装を身に纏った法官、医者、博士たちが尊敬されるのは、彼らがもつ知識を「正しく」判断する理性を想像力が妨げるからであつた¹¹⁾。しかし、理性がいかなる手続きや方法に則って正しい判断をするかということはまだ明らかになっていない。理性とは、これまでのところで、人間の能力のうちで正しい判断をする能力であるとししか規定のしようがない。つまり、「理性」の判断の正当性は即自的なものである。パスカルは「理性」についてこのような認識をもっていた。そして、このような認識は「本性」と「理性」の同一視と無関係ではない。

A. ラランドはその『哲学辞典』の《Raison》の項目のなかで、まず、「認識の対象」(objet de connaissance)としての《raison》、すなわち「理由」や「根拠」の意味で用いられる《raison》と、「能力」(faculté)としての《raison》を区別し、つぎにその「能力」としての《raison》を以下の5つの意味に識別している。

- A. Faculté de raisonner discursivement, de combiner des concepts et des propositions.
- B. Faculté de 《bien juger》 (Descartes, *Méthode*, I, 1), c'est-à-dire de discerner le bien et le mal, le vrai et le faux (ou même le beau et le laid) par un sentiment intérieur, spontané et immédiat.
- C. Connaissance naturelle, en tant qu'elle s'oppose à la connaissance révélée, objet de foi.
- D. Système de principes *a priori*, dont la vérité ne dépend pas de l'expérience, qui peuvent être logiquement formulés, et dont nous avons une connaissance réfléchie.
- E. Plus spécialement, faculté de connaître d'une vue directe le réel et l'absolu, par opposition à ce qui est apparent ou accidentel; et quelquefois (par suite l'identité entre la pensée et son objet), cet absolu lui-même¹²⁾.

この区分に即して言えば、ここでパスカルが想定している「理性」は、Aのような、論証や推論の際に使用される精神的な能力としての理性にとどまらないいわば無限定的な能力である。確定的な方法によらず「正しい」判断を与えるものとしてとらえられるかぎり、この能力の特徴は、B・D・Eの規定から多くの示唆を得ることができると思われる。つまり、この能力は、必ずしも論証によって対象の真理性を認識するのではなく、「直観によって」正しく判断でき、アプリオリに真理性を認められる諸原理をもち、また、絶対的なものを「一目で直接」認識しうるのである。パスカルは、このような能力を「理性」として想定するかぎりにおいて、これを「本性」そのものと混同しえたと思われる。この能力は所与性および不確定性によって特徴づけられている。これは、正しく判断するために自然に（生来）備わっている能力であり、また、その判断の方法は、論証や推論という手段によらないため、明白に規定されえない。それはむしろ理由なく正しく判断する能力である。このとき、この能力は「人間の存在そのものをなす」（引用10）と言われる。

本能と理性。これらは二つの本性のしるしである¹³⁾。

人間的な確実さといっても人間のうちには存在せず、そこには理性があるだけである¹⁴⁾。

「理性」を「本性」のしるしと規定する理由は、こうした能力を「理性」とみなす認識にもとづいていると言える。そして、人間の「理性」がこのように本性的に備わる正当な判断能力であるとみなされていたからこそ、人間の「真理」に対する無力さの原因が、原罪の教説を介して、ほかならぬ「理性」に求められえたのである。

さて、以上で、「邪欲」「情念」「想像力」によって「理性」が無力であるとされる事情、およびそうして無力だと断ぜられる「理性」がいかなる能力であるかを確認した。しかし、以上の考察では、まだ「理性」が真理に対して無力であるということの事情にはなお、にわかには納得し難い不明瞭な部分がある。この事情は、これまで見たとおり、きわめて先験的な根拠づけによって構成されている。一方では人間の「真理」に対する無力さは神と人間との存在論的差異にもとづいて帰結されたものであったし、他方ではその真理への無力がそのまま「理性」の無力さとみなされ、その根拠が原罪の教説によって求められていた。人間の理性の無力さが、いわば原罪によって運命づけられている。そしてさらに、その「理性」は明確な方法的手続きを経ずに判断する能力なのである。人間の理性が無力なのは、正しい判断を行うその働きが原罪によりもともと妨げられているから——このような論拠が同語反復的なあいまいさを含んでいることは明らかである。

パスカルが理性を無力だと断ずるには、また別の事情があった。以上の事情が、教説から演繹的に引き出されたアプリアリな因果関係によって説明されるとすれば、これから述べる事情は、さきほど考察した、人間の本性に備わる自然的な正しい判断能力としての「理性」とは区別されるべき「理性」——すなわち、推論的能力としての「理性」（ラランドの区別で言えば、Aに相当）——が、ある対象に対して無力であるという観察事実から帰納的に導かれる、アポステリオリな因果関係によって説明される。ここで、便宜上、本性的能力としての理性を「理性1」、推論的能力としての理性を「理性2」と呼んで区別しておくことにする。

われわれは真理を理性によってだけではなく心によっても知る。われわれが第一原理を知るのは心によってである。それには関係ない理性のはたらきが第一原理を打ち倒そうとしてもむだである。ピュロンの徒はそれだけを目的としているが、むだなことをしているのだ。われわれは今夢を見ているのではないことを知っている。そのことを理性によって証明することがいかに不可能であったとしてもである。このような不可能は、われわれの理性の無力さを結論するのにはほかならないのであり、ピュロンの徒が主張するように、すべてのわれわれの認識が不確実であるということを結論するのでは決してない¹⁵⁾。

この断章において無力だとされる「理性」は、明らかに論証的能力としての理性、すなわち「理性2」である。そしてその無力さは、第一原理の認識——例えば、空間・時間・運動・数といったものが存在するという認識——の確実さを証明できないという経験的な事実から引き出されている。パスカルにとって「理性」の真理に対する無力さは、「理性1」の先験的な無力さだけではなく、このような「理性2」の経験的な無力さをも根拠に導かれたと考えられる。そして、本来区別されるべきこの2つの「理性」の違いが、彼によって明確には意識されていなかったのではないかと思われる。彼にとっての「理性」とは、この2つの理性の概念が渾然一体となって構成されたものであり、そして、その混同のせいで、理性の無力さは先験的・経験的両様の根拠によって証立立てられることになったと推測するのは無理ではないだろう。彼にあって、推論的能力としての「理性」の無力さの経験が、そのまま心情的に、人間の本性に本来的に備わった判断的能力としての「理性」の無力さと通じ合っていたのではないだろうか。

これに類する「理性」の二つの側面の混同は、次に述べることから示される。パスカルは『護教論』の執筆にとりかかる数年前の1655年に書かれたとされる『幾何学的精神について』（*De l'Esprit géométrique*）において、真理の証明を説得的なものとするために有用な方法として幾何学的方法を取り上げ、それによる論証の方法を述べている。彼が

幾何学的方法を選んだ理由は、この学問だけが理性による方法 (raisonnement) の真の規則に通じており、誰も知らぬ者がなくらいに分かりきった三段論法の規則などに低迷せずに、理性的判断 (raisonnement) をあらゆるものに及ぼして行く真の方法をしっかりと守って、その土台の上に築かれているからにはかならない¹⁶⁾。

そして、その方法に必要とされる原則として、「すべての用語を定義し、すべての命題を証明する¹⁷⁾」というものを挙げる。しかし、この方法をつきつめるのは不可能である。

なぜなら、最初用語を定義しようとすれば、その説明に用いる先行用語を想定しなければならないし、同様に、最初の命題を証明しようとすれば、それに先行する他の命題を想定しなければならないことは明らかだからである。そんなわけで、ついに初源のものにたどり着けないことははっきりしている¹⁸⁾。

パスカルは、定義不可能な用語として、「空間、時間、運動、数、数の等しき、その他いろいろあるこうした類いのことがら」¹⁹⁾を挙げ、証明不可能な原理として、「どんな運動、どんな数、どんな空間、どんな時間でも、つねにそれより大きいもの、それより小さいものが存在するということ²⁰⁾」を挙げている。一方で、このような定義不可能な用語、証明不可能な原理が存在することは、「パンセ」S142を記すパスカルにとっては「理性」の無力さを示すのにほかならなかった。

空間、時間、運動、数が存在するというような第一原理の認識は、われわれの理性のはたらきがわれわれに与えてくれるいかなる認識よりも確実であり、理性が頼りにしなければならないのは、このような心と本能による認識であり、また、理性がすべての論述の基盤を置くのもこのような認識なのである。[……]

このような無力さはしたがって、あらゆるものを判断したがる理性をへりくだらせるのに役立つべきものであつて、われわれのうちにある確実さを打ち倒すのに役立つべきものではない。もしそうなら、われわれに教えてくれるものは理性しかないことになる²¹⁾。

ところが、「幾何学的精神について」では、S142でいわれる「第一原理」とほとんど同じことがらが幾何学的方法を進めるのに矛盾しない事実として容認され、そればかりか、その事実こそがより強く「理性」に訴えかけることができるとされる。

これらすべての真理が論証されるわけではない。しかしながら、これらは幾何学の基礎であり原理である。それらの真理の証明をできなくさせている原因が、それらがはっきりしな

いためではなく、反対にきわめて明白であるためであるのと同様に、こんなふうに証拠を欠いているのは欠陥ではなくむしろ完全さなのである。

このようにして、幾何学は諸対象を定義することも、諸原理を証明することもできないことが明らかになる。しかし、この唯一の有利な理由によって、そうした諸対象も諸原理もきわめて明らかな自然の明瞭さのなかにあるのであって、この明瞭さが、論証よりもより強く理性を納得させるのである²²⁾。

証明できないという事実が、一方では「理性」の弱さの根拠とされ、他方では「理性的方法」の明証性の積極的な根拠とされる。しかも、そこで証明の対象となることがらはほとんど同一である。このことは、パスカルが「理性」という観念に見いだされるはずの複数の相の区別を明確に意識していなかったことを示すであろう。S142における「理性」が明確に論証的な能力である「理性2」を示すのに対し、「幾何学的精神について」の「理性」は必ずしも論証という限定的方法に訴えなくとも対象の真理性を判断しうる「理性1」としての能力を示すと考えてよいであろう。

そこで、「幾何学的精神について」のなかで述べられた次の重要なことばに注目したい。幾何学的方法の限界が示されている。この方法は全過程を理性にもとづいて真理の探究を行うことを目的としたものであった。したがってこのことばは、理性の有効性の限界をも示すと考えられる。

したがって、この学問[＝幾何学]があらゆることがらを定義せず、また証明しないとしても、それは、そんなことが不可能だというただ一つの理由によるのである。

しかしながら、自然はこの学問が与えることのできないすべてを与えてくれるので、幾何学の秩序こそは、確かに人間的な完全さ以上のものは与えはしないが、人間が到達しうるだけのすべての完全さをもちあわせているのである²³⁾。

「幾何学」は、理性のみによって真理を識別する方法であるかぎり、それが基盤とする原理や定義は、証明不可能なものであったとしても、理性によって真実であると認められなければならない。このように、幾何学が依拠する理性とは「理性1」であると言える。そして、このような能力こそが「人間の到達しうるすべての完全」を保証する。ただし、そうした「完全」も、「人間的な完全さ」以上のものではない。パスカルはこの能力の限界を示唆せずにはおかない。人間が到達できない完全さ、すなわち真理もまた存在することが明らかに含意されているのである。いずれにせよ、パスカルによる「理性」とは、推論的能力——推論という手続きを経てはじめて対象の真理性を判断する能力——である一方で、人間が到達しうるかぎりの真理を判断する能力、

そしてそのかぎりで、人間的な認識原理にとどまる能力である。

このように限界づけられることによって、この能力は絶対的に知ることのできない種類の真理をもつことになる。それが「信仰」に関わる真理であることは明らかである。「人間的な完全さ」はおのずと神の示す絶対的な完全さと差異化されているのである。

(2) 理性と信仰

パスカルにとっての人間の「真理」に対する無力さと「理性」との関係、したがって結局、人間の「理性」が「真理」に対して無力とされる理由が以上で明らかになった。また、その際に想定されていた「理性」とはいかなるものであったかについても考察した。ところで、護教論者パスカルにおいて、理性が妨げになる領域として最も鋭敏に意識されていたのは、言うまでもなく信仰の領域である。ここで、理性に固有の領域と、それが到達できない信仰の領域がいかなる対立を示しているかを確認しておきたい。

これまでの考察から、パスカルにおいて「理性」とは、「心」による直観的契機（これが後に問題にする《sentiment》である）と対立的な働きを示す推論的方法に依拠する部分を含みながらも、それにはとどまらない人間の本性的な認識原理で、それによって人間の知りうるかぎりの真理を獲得できるが、絶対的真理の認識に対しては無力な能力である、と理解しておくことが可能であろう。幾何学的方法は、こうして、論証的理性（「理性2」）では認識しえないはずの「原理」——証明という手続きではその確実性が判断できない命題——から出発する方法であるにもかかわらず、その全過程を「理性」に依拠した方法であることができたのであった。

ところで、「神に関する真理」は、「理性を運用して真理を識別する方法」の対象からあらかじめ除外されている。「幾何学的精神について」は2部に分けて述べられる。パスカルによればこの両方を合わせれば、「真理を証明し識別するために理性を運用して行くのに必要なすべてが伝えられることになる²⁴⁾」のである。その第2部である「説得術について」(*De l'Art de persuader*)のなかで、パスカルは「人間的なことから」(*choses humaines*)と「神的なことから」(*choses divines*)とを区別している。

私はここでは、神に関する真理については語らない。それについては説得術をもって扱うことは避けるようにつとめたい。というのは、神に関する真理は自然を無限に超えているからだ。神だけが、神自身のみ心にかなうやりかたでそれをたましいのなかにお入れになることができるのである。

神はそうした真理が心から精神へと入ることをお望みになったのであり、精神から心へではなかったことを私は知っている。それは、意志が選ぶことがらの審判者になろうとする理

性の傲慢な力をへりくだらせるためであり、また、汚れた執着によってまったく墮落してしまつた力の弱った意志を立ち直らせるためであった。こうして、人間的なことがらについて語るときには、愛する前に知ることが必要だと言われ、それが格言となっているところを、聖人たちはその反対に、神的なことがらについて語るときには、知る前に愛さなければならない、人は神への愛(charité)によってのみ真理のなかへと入ることができると言い、このことを最も有益な金言のひとつとしているのである²⁵⁾。

幾何学的方法の一環として、あくまでも「理性」に則って真理を識別することを目的とする「説得術」が、「神に関することがら」を探求の対象に含めないということがここで明確に告げられている。「神に関する真理」とは、明らかに信仰の対象になることがらである。こうして、パスカルにあって、信仰の対象となる真理は理性によって判断することが不可能なのであった。そして、この場合の「理性」が単に、直観的契機を排除する狭い意味での論証的理性を意味するにとどまらないことに注意すべきである。第一原理の確実さの認識を導く直観的契機は、この場合の「理性」とは対立しえない。この理性は言わば、「理性1」の範疇に属するものである。さきほども見たように、幾何学の関心は人間が到達しうる最高の完全さに達することであった。したがって、ここで説得術がその対象に信仰的真理を含めないという事実は、信仰的真理は人間が（自らのもつ能力によって）認識できる真理ではないということを示している。先の引用で言われるように、「神に関する真理は自然を無限に超えている」。自然の次元にとどまる限り、探求の対象となる真理が論証不可能であろうと、それはなお理性による認識の範囲内にとどまる。信仰と理性の対立は、信仰の対象が論証不可能だという事実以上に、それが自然の次元を超えているという事実に帰されるのである。理性によって得られる真理と信仰によって得られる真理は、そのような決定的な差異によって隔てられている。そのような差異が、それぞれの認識のなされ方に関する「格言」をもって表現されている。一方が愛する前に知ることが必要であるのに対し、他方は知る前に愛することが求められるのであった。

『真空論序文』(*Préface sur le Traité du Vide*)では、あつかう問題の種類に応じて、その解決は判断に「理性」と「権威」(autorité)とを使い分ける必要が説かれている。「権威と理性とはそれぞれに別個の支配権をもっている²⁶⁾」。それによると、「増加させられることによってはじめて完全になることができる」幾何学、算数、音楽、自然学、医学、建築学など、実験と理性的判断にゆだねられた学問とは異なつて、「神学」は権威が大きな力をもつ学問である。神学においては聖書という「権威」に頼る以外に真理を知ることはいできない。そこでパスカルは言う。

神学の基礎は自然と理性を超えたところにあつて、人間の精神は自分自身の力ではとてもそこに到達できないほどに弱く、ただ全能の超自然的な力によって運ばれないかぎり、こ

の高度の理解にまでたどり着けないのである²⁷⁾。

パスカルは、信仰が対象とする真理を理性が対象とすることができないという事態の根拠を、理性が人間の精神の自然的な次元においてのみ有効な能力であるという事実そのものに認めている²⁸⁾。

このようにして、再び言えば、パスカルにあって、「理性が無力である」という観念は、少なくとも一面的には、論証不可能な確実性の存在という経験的な事実をもとに構成されたのであるにもかかわらず、その無力さが宗教的真理に対して言われる際には、もはやそのような経験とは独立している。人間的・自然的な真理にのみ有効な「理性」という能力は、神的・超自然的な真理に対してはもともと無力なのである。ジルベルト・パスカルによると、弟は、父が教えた「すべて信仰の対象となることがらは理性の対象とはなりえないという格言²⁹⁾」にきわめて従順であったという。これら二つの間にはこのような決定的な差異が横たわっているのである。

信仰と理性の対立は、こうして超自然的・神的原理と自然的・人間的原理との対立に帰着する³⁰⁾。ところで、すでに引用した一節のなかで (p.16)、「理性」は第一原理の認識を担う「心」による直観的契機との対立性をも示していた。この契機は、同じ断章のなかで「感じること」(《sentir》, 《sentiment》)という語で説明されている³¹⁾。信仰と理性との対立は、《sentiment》と「理性」との対立とは性質を異にする。一方が超自然的次元と自然的次元との対立であるのに対し、他方は自然的次元内部での対立である。《sentiment》と「理性」とはともに、自然的次元、すなわち人間にとって「自然に」認識が備わっている諸知識を対象とする次元での、その諸知識についての二つの異なった認識方法である。ところが、信仰に対置される「理性」は、信仰が超自然的な知識や真理に対する認識を得る手段である以上、自然的な真理に対してはすべて支配力をもたねばならない。単純化していえば、《sentiment》と対立する理性は「理性2」にすぎず、信仰と対立する理性は「理性1」である。

しかし、パスカルにおいて、理性が信仰の示す真理に対して無力であるという認識は、自然的次元での理性の無力さ、すなわち論証不可能な確実性の存在という経験的事実から引き出された無力さがもとになっていることは確かである。断章S 142はまさにこの事実を物語っている。そこでは、自然的次元での対立が宗教的真理に対する理性の無力さを語る根拠とされている。第一原理の確実性や、今自分が夢を見ているのではないという事実の確実性を「理性によっては証明できない」という経験を根拠に理性の無力さが説かれ、心において生じる《sentiment》(感じること、感情)の有効性が導き出されたあと、このように述べられる。

そういうわけで、心に感じさせること(sentiment du cœur)によって神が宗教を与えたよう

な人たちは、きわめて幸福であり、きわめて正当に納得している。しかしながら、宗教をもたない人たちに対しては、われわれはそれを、神が彼らに心に感じさせることによって与えるのを待って、理性的方法によってしか与えることができない。そのような心に感じることなくしては、信仰は人間的なものでしかなく、救いには役立たない³²⁾。

「そういうわけで」の語が示すとおり、第一原理に対する理性について言われた無力さがそのまま宗教に対する理性に敷衍されているのである。このようにして、「証明できない」という経験とは原理的には独立して得られたはずの、信仰の領域と理性の領域の間の区別に、証明の可否という標識が再び介入してくる。このときまさに、自然的次元においてはたらく認識手段であった《sentiment du cœur》が超自然的次元においても必要とされるに至るのである³³⁾。

こうして『護教論』では、理性と信仰の原理上は解決不可能な対立によって人間に決定的に拒絶されている宗教の真理性に対する認識が、《sentiment》という人間に備わる別のはたらきによって可能とされる。このはたらきがいかなるものかについての検討は次章で行うとして、パスカルにおける上のような事態は、「理性」という能力に認められる複数の相の同一視ないし混同による、「理性の無力さ」という観念の独立の事態に端を発していると言わねばならない。理性と信仰はこうして、経験以前の存在論的差異によって対立されられつつも、論証の可否という具体的な経験による対立性をも内含しているのである。アポロジーはここから出発する。

[2] 「キリスト教護教論」における《sentiment》の意義

パスカルにとって、信仰を説くことは理性的方法に依拠することによってしかできなかったが、このことそれ自体によっては対話者に信仰を与えることはできないということは、彼に十分自覚されていた。信仰は「心に感じること」《sentiment du cœur》によって神が与えるものにほかならないからである。こうして、《sentiment》が、これまでに述べた信仰と理性との非両立性に対して何らかの解決をもたらすものとしての意義をもつことが予想される。ここからは、《sentiment》が信仰における不可欠な契機だと規定されることの理由と、そのことの『護教論』についての意義について考察する。まずは、《sentiment》という語がもつ語感と諸性質を確認することから始める。

(1) 《sentiment》の意味領域とその適用

A・ラランドの『哲学用語辞典』や、フルチエールの辞書(1727年版)によると、《sentiment》の語は、感じる行為(作用・働き)、その行為から発した感情、および感じ取る能力という、動詞

《sentir》の主体・客体の双方のあらゆる側面に関わる非常に広範な意味領域を備えていることが分かる。

そこで、「感じる」という動詞自体に含まれる意味もあわせて、《sentiment》という語が用いられる際に問題となることがらを具体的に考えれば、この語が用いられる際に無理なく了解される基本的なことがらとして、おおよそ以下の5点を認めることができるであろう。

- 1：受動的に生じる行為・作用であること
- 2：感じる対象となる事態について、それが真実あるいは現実であるという確信を含むこと
- 3：その確信が個人的・主観的なものであること
- 4：感じ取られる事態が自然的なものにかぎらないこと
- 5：行為や作用の発生が即時的・瞬間的であること³⁴⁾

さて、《sentiment》のもつこうした語感上の特性は、およそ《raisonnement》のもつそれとは正反対のものであると言える。とくに、第5点および第2点における両者の相異は、パスカル自身のことばから理解できる。

理性はゆっくりと、非常に多くのことがらに目を配り、非常に多くの原理にもとづいて行動する。そしてそうした原理はつねに目の前に現れていなければならない。このため理性は、そうした原理がすべて目の前にないと、始終活力を失ったり迷ったりする。直観《sentiment》はこのようには行動しない。それは一瞬で行動し、つねに行動する用意ができている。だから、われわれの信仰は直観のなかに置いておかなければならない。そうでないと信仰はいつもふらふらとしたままであろう³⁵⁾。

すなわち、《raisonnement》をここでの「理性」《raison》の働きであると考ええるなら、それは「ゆっくりと行動する」、つまり、推論や論証には時間がかかるのであるし、その作用による判断がひとたび下されても、その判断の材料たる「原理」が常に現前していないと、なされた判断の正しさについての確信が弱まってしまうのである³⁶⁾。また第4点についての対立性は、「説得術について」に見たように、《raisonnement》の対象は「人間的なことがら」に限られるのであったし、「第18プロヴァンシアル」でも「理性」の判断する対象は「自然的で理解可能なことがら」に限られていた、という事実を引き合いに出すまでもなく明らかであろう³⁷⁾。

ところで、アポロジの読者として想定されているのは、宗教が理性的な判断とは相いれない内容をもつという理由で、信仰に至る動機をもたないような人々であると考えてよいだろう。このような人々に信仰の正当性を説くためには、二通りの方法が考えられる。すなわち、第一に、

宗教は理性に反するものではないという証拠を提示してその真実性を示すこと、第二に、宗教は理性に適合しないものだと思えたうえで、理性のあやまちや至らなさを説くことによってその真実性を示すことである。パスカルはこれらのうち、第二の方法にしたがったのは言うまでもないのだが、推論のある段階では第一の方法を取り入れようとしていた。このことについてここでは詳しくは触れないが、それは例えば、宗教には預言や奇跡という証拠があると主張することによって、宗教が理性に必ずしも反するものではないということを示そうとする態度に見いだされる³⁸⁾。これは、彼が、信仰を説くという試みが帰着する絶望的な事実³⁹⁾に明敏であったことをうかがわせている。それは、いかなる方法を通してであれ、信仰の正当性を説くためには、宗教の真実性を理性に適合的な仕方⁴⁰⁾で納得させるという手続きが不可欠だという事実である。たとえ第二の方法をとるにしても、宗教が理性を超えたものであるということをほかならぬ理性に訴えることなくしてはアポロジ⁴¹⁾ーは成立しないのである。アポロジ⁴²⁾ーの困難はこの点にある。

《raisonnement》という作用とはあらゆる点で対極的な価値をもつ《sentiment》を、信仰において不可欠な契機と位置づけることの意義は、何よりも宗教の真実性そのものが理性のする判断に適合するものではないということを表明することであった。この意味で、《sentiment》はまさに、パスカルが目指す『護教論』の特徴を集約する概念であると言える。次に、断章に即して彼の信仰観を具体的に見ることによって、この事情を確認していくことにしたい。

(2) 信仰の生成と《sentiment》

すでに言及した断章S142では、理性によってではなく《sentiment》によって認識される真理が存在し、その真理の確実性は疑いがないということが述べられた後、信仰においても《sentiment》によって与えられた者は非常に正当に説得されていると語られていた。この断章のなかで信仰について述べられているのは、最後の一段落に相当する次の部分だけである。

そういうわけで、心に感じさせること(sentiment du cœur)によって神が宗教を与えたような人たちは、きわめて幸福であり、きわめて正当に納得している。しかしながら、宗教をもたない人たちに対しては、われわれはそれを、神が彼らに心に感じさせることによって与えるのを待って、理性的な方法によってしか与えることができない。そうした心に感じることなくしては、信仰は人間的なものでしかなく、救いには役立たない³⁹⁾。

ここで認められるパスカルの信仰観の眼目は、

- 1：信仰とは神が与えるものであること
- 2：それは《sentiment du cœur》によって果たされること

3：人間は信仰を「理性的な方法」《raisonnement》によってしか与ええないこと

の3点である。

神を知ること。

預言や証拠を知ることなしにキリスト者であるような人々を見かけるが、こうした人々はそれでもやはり、それらを知っている人たちと同様に神について正しく判断している。彼らは、他の人たちが精神によって神を判断するように、心によって判断しているのである。彼らを信じるように傾けているのは神ご自身であり、それゆえに彼らはきわめて効果的に納得しているのである⁴⁰⁾。

信仰は神の与えるものである。このかぎりでは、信仰とは人間にとって決定的に受動的な契機である。そしてこの受動的性質は、上の一節からもうかがえるように、信仰において、その対象となる宗教あるいは神の証拠や論理的な証明といった、理性的判断に適合するようなことがらが重要性をもたないという主張につながる。預言や証拠に関する知識を備えていない人々が、かえって非常によく宗教に対して確信を抱いているということがあるし、そういう人々にこそ神自らが信仰を与えたのだと言えるからである。パスカルにとって、キリスト教が奇跡・証人・知識という理性に適うと目される側面を備えてはいても、それだけでは神を知り、愛することはできない。そのことを可能にするのは「知恵もなくしるしもない十字架の愚かさの力」(la vertu de la folie de la croix, sans sagesse ni signe⁴¹⁾)をおいてほかにはないのである。

ところで、神が信仰を与えるのは、人間の「心」を通じてである。信仰の生成にはいつも「心」が問題となっている。

素朴な人たちが理屈を知ることなしに信じているのを見て驚いてはならない。神は彼らにご自身を愛する気持ちと、彼ら自身を憎む気持ちとを与え、彼らの心を信じるように傾けているのである。神が心を傾けないかぎり、人は、救いに役立つ信心と、ほんとうの信仰をもって信じることは決してないであろう。そして、神が心を傾けるならば、人はただちに信じるであろう。

このことをダヴィデはよく知っていた。「神よ、私の心を傾けてください……」⁴²⁾

神は人間の心を「傾ける」わけである。そして、この事態を人間を主体として見れば、人間の心が神を「感じる」ことになる。《sentiment》はまことに、「心」がおこなう作用であった。しかも、神が人間と直接の交感を行うというこのような信仰の理想的な状態にあって、「理性」とと

いう能力は問題にならない。証拠や理屈などの、理性を必要とする契機(《raisonnement》)はここに介在する余地はないのである。

神を感じ取るのは心であり、理性ではない。これこそが信仰である。理性ではなく心にこそ感じられる神。

心には理性が全く知らない理由がある。そのことはきわめて多くのことがらに認められる⁴³⁾。

「心」はまた、「愛する」器官でもあるという点で、信仰に深い関わりをもつ。「説得術について」において示されたように、信仰に関する真理―「神に関する真理」―は、「人間的なことがら」とは反対に、「愛する」ことが「知る」ことに先立たねばならなかったのであるが、さまざまな断章において、この「愛する」はたらきが「心」に帰せられているのである。

私が思うには、心は、それがひきつけられるに応じて、普遍的存在を自然に愛するし、自分自身も自然に愛する⁴⁴⁾。

そしてやはり、「理性」は愛する働きとは無縁である（「あなたが自分を愛するのは、果たして理性によってであろうか⁴⁵⁾」⁴⁶⁾）。

以上のように見れば、パスカルにとって信仰は受動的なものであり、またその生成に何ら理性の関与を必要としないことが分かり、一方でそうした信仰観において、信仰の生成に《sentiment》なる契機が必要とされた事情も理解できる。神が人間に関わるのは「理性」ではなく「心」を通じてであって、そのとき「心」に生じるはたらきが《sentiment》なのであった。このように、《sentiment》とは、信仰が神からのはたらきかけを必要とすることを保証し、そして、信仰が、人間の行為であると同時に人間が引き合いに出す道具にすぎない《raisonnement》（理性のはたらきである「推論すること」を意味する一方で、「証拠・論証」をも意味する）を無用なものとなすという事実を正当化するひとつの概念装置としての意義を担っているのである。さらに言えば、《sentiment》がそのような役割を果たす資格は、その語が含む語感が保証している。先に見たような、この語が了解させていることがらはまさに、パスカルが考えた信仰の性質を非常にうまく説明しうるのである。

真の信仰は《raisonnement》によっては与えることができず、《sentiment》によって神が与えるものであるという、断章S142における主張は、信仰を与えられる側を主体として言えば、信仰は《raisonnement》によっては得られず、《sentiment》によってはじめて得ることができる、ということになる。何かを伝えるということが問題になっているとき、《raisonnement》という手段

による場合、その主体も客体も人間であるのに対し、《sentiment》による場合は、主体が神であることが可能である。「理性」という能力が人間的な原理にとどまることはこれまでに強調してきたが、ここでも《raisonnement》という作用はあくまでも人間の行為にともなうものであることが理解できる。

《raisonnement》によって与えられる信仰は、人間が与えるものであるかぎり「救いに役立たない」。そのときその信仰は「人間的なものにとどまる」からである。これに対して、神は人間に《sentiment》を通じて信仰を与えることができる。「心」に生じる《sentiment》という作用は、理性とは異なり、人間の行為・能力でありながら、その受動的な性格ゆえに、神との交感を可能にするのであった。

パスカルの護教論は、あくまでも理性に信頼を置き、信仰（あるいはその内容）が理性に反するがゆえにそれを拒む不信仰者を対象にしていた。彼はこのことを前提に、理性の無力さを訴え、神という真理が理性にとって到達できないものであることをくり返し主張した。彼はそして、理性とは別のさらに確実な認識を得る能力として《sentiment》を導入し、それを通じて神の認識を得る——神の真実性を認識しうる——可能性を示唆することによって、信仰の正当化を試みた。もとより、《sentiment》や《cœur》という語は、理性的契機とは異なった認識の手段でありながら、対象とのより直接的なかかわりを通じてその対象の真実性を極めて強く確信する能力であるという価値を内在的に負っているのであった——ひとまずはこのように了解できる。

しかしながら、不信仰者に向けて「護教する」という現場についてより深く考察すると、このような了解がパスカルによってすんなりと達せられたかどうかは疑わしく思えてくる。信仰と理性の対立にともなう困難をより詳しく検証したい。

(3) 護教論者パスカルと《sentiment》

パスカルは、デカルトが依拠した理性神学に則って信仰の正当性を説くことを強く拒絶した。それは第一に、彼にとって信仰をそのような方法で説くことが、対話者を信仰へと誘うという実践的な観点からも無益であったからであるし、第二に、彼本人において信仰と理性との決定的な両立不可能性が明確に自覚されていたからであった。しかしながら、彼のこのような自覚を語ることと、不信仰者を信仰へと導くことの間にもやはり依然として断絶がある。回心者パスカルのうちに信仰と理性との両立不可能性がそのまま信仰の正当性に結びついているとしても、護教論者が読者として想定する不信仰者にとっては、まさにその同じ事実が信仰の不当性に結びついているはずだからである。くり返しを恐れずに言えば、護教論者の困難は、一つの解決不可能な事実に着着する。それは、「護教論」を説くという行為が、信仰を言語を通じて正当化する行為であるかぎり、いかなる手続きを通じてであろうと、その行為はあくまでも「理性」への訴えかけを含んでいるという事実である。それは、デカルトのように神の存在を理性的方法で論証するとい

う手続きにおいてばかりでなく、ここでのパスカルのように、信仰の前での理性の無効性を説くという手続きにも変わらず当てはまる。すなわち、神や宗教の真実性が理性的な判断と適合しないような場合、言語によって信仰の正当性を示し、いわんや、回心を促すことは、究極的には不可能なのである。信仰における《sentiment》の必要性、その神からの受動性を確信していたパスカルは、まさにこの困難を意識していたと言える。

『護教論』とはこうして、不可能なことを可能にしようともくろむ技術である。人間の行いでは本来的には果たされえないことがら——ここでは、信仰の正当化と回心への促し——を目的としているのだから。端的に言えば、回心者としての真情——すなわち信仰と理性との両立が決定的に不可能であり、さらには、信仰が神によってはじめて与えられるものであるという認識——にしたがうことはすでに護教論者たることと齟齬を来しているわけである。護教論者たることは何らかの点で策略家たることを前提とする。

信仰において《sentiment》の契機が必要だと述べることには、信仰における「理性的な方法」《raisonnement》の無効性と、信仰の神からの受動性の主張が含意されていることは前に見た。この主張をもし純粋に回心者の真情の発露によるものであると見なすならば、読者を信仰に誘うということを企図するアポロジは全き意味で挫折してしまうのである。

ところが、これを護教論のなかの一節として用いるやいなや、ある種の策略的な価値を担うことが可能である。すなわち、アポロジの不可能という主張それ自体がアポロジの目的に組み込まれてしまうのである。信仰は人間が理性的な手段によって与えることができないと述べることは、その信仰の内容を論証できないという事実を正当化することにつながる。このことはまさに宗教と理性との両立不可能性を宗教の真実性として提供する。このとき信仰が正当なものとなり、読者は回心へのきっかけを得ることができる。パスカルがこの事実に対して意識的でなかったとは考えられない。

理性に認識しえない信仰の正当性を認識しうる道具として規定された《sentiment》は、上のような事態を考慮すれば、きわめて技術的・戦略的な価値を負う語であることが分かる。信仰に直観的契機の必要を説くことで信仰と理性の両立不可能性を正当化し、ひいては信仰そのものを正当化する可能性が生じるわけである。

くり返せば、理性と信仰の絶対的な隔絶、信仰における《sentiment》の必要、この2点を表明するアポロジの試みは、結局のところ、まさにそのアポロジが告げる事実——信仰が神からの賜物であって人間が与えることはできないという事実——に抵触する。アポロジは挫折せざるをえない。ところが、さらにひるがえって、この挫折の示唆を言語によって行うことによって、信仰の正当化の可能性が開かれる。『護教論』はつまり、その試みの端緒においてすでに回心者の真情を裏切る構造を備えているのである。

回心者パスカルが護教論者となるためには、こうして、信仰を正当化する試みを自己から独立

させる必要があった。そして、ひとたびその独立がなされれば、アポロジーは純粋な言語ゲームとしての自立性を担う。「護教論」はひとつの虚構として企図されなければならなかった。このかぎりでは護教論者は読者をレトリックを通じて回心へと誘うべく心を砕く正当な理由を得るのであった。

ところで、信仰には何らかの確信の契機が必要である。《sentiment》はこの契機を与える経験としての側面をもつ。最後に、われわれはこの観点から、再び《sentiment》とはいかなるものかを問うておきたい。

(4) 回診者パスカルと《sentiment》

人間の行いによって信仰を与えようとする行為である「護教」が本来的には不可能であるという事実は、結局のところ信仰の正当性とはその人本人にしか認識されえないという事実に起因する。言い換えれば、信仰と理性との隔絶は信仰の個人的・主観的性格にもとづくのである。そしてそうである以上、その正当性は他人から伝えられることはできない。信仰が正当だと感じられるためには、すなわち信仰に至るためには、何らかの個人的な経験が必要になるだろう。

パスカルにとってこの体験は、1654年11月23日の夜起こった。彼の死のすぐ後、「メモリアル」(*Mémorial*)と通常呼ばれる、この日の回心の体験が記された2枚の文書が、紙片とそのほとんど忠実な写しである羊皮紙のかたちで、故人の胴着の裏地に縫いつけられてあるのが見つかったのである⁴⁷⁾。

メナール教授は、この文書に現われる《FEU》と《DIEU》の二つの語の間に象徴関係を指摘する。《FEU》は神の顕現(manifestation)、ただし精神や心においてであって、感覚器官を通じない顕現を意味すると言う。その神が「哲学者や学者の神ではない」ことから、ここに現れた神は思考の手段のみによって人間が到達しうる抽象ではないことが分かる。結局、「メモリアル」の中心的な体験とは、神の生ける真理への接近の体験であった。メナール教授によれば、「神の不在の冷やかな状況ののちに神の顕在の《炎》(feu)が現れた。理性にしか現れていなかった状況が終わり、神は心に感じられたのである⁴⁸⁾。」

まことに、「神は心に感じられた」のであった。パスカルは、「哲学者の[神]でもなく学者の[神]でもない」の語句の後に、「確実さ、確実さ、感じる、喜び、平安」《Certitude, certitude, sentiment, joie, paix》(羊皮神では「確実さ、喜び、確実さ、感じたこと、見たこと、喜び」《Certitude, joie, certitude, sentiment, vue, joie》)と書き記しえた。このことはまさに、神の哲学的探求の誤り、理性によって神を知ろうとすることの無益さと、自らにおいてはその段階が終焉したのだという自覚を示しているし、さらに重要なことに、《sentiment》の生成、すなわち神を感じたことと、その体験の「確実さ」——この語はくり返される——をはっきりと示しているのである。

このテキストは「護教論」のように対話者ないしは読者を想定して書かれたものではない。こ

れは自分に向けて書き留めておいた「覚え書」である。パスカルはしかも、この覚え書の存在を肉親にすら知らせなかった。彼はこれを書くことで、また予備を取っておくことで、さらには衣服の裏地に縫いつけて常に持ち歩くことによって、自らの得た体験やそれにもとづく祈願および決意を常に記憶すること、あるいはその瞬間を常に想起することを意図したのであった。このことは何を意味するであろうか。

パスカルがこれほど大切にしていたこの覚え書の紙片の存在を、回心の希望とそれに至らぬゆえの苦悩を告白した相手であるジャクリューヌにさえ告げなかったという事実は注目に値する。姉妹たちは手紙で兄弟の様子を気づかい合うくらいに彼の懸案について気にかけていたのであるから、待ち望んでいた体験が自らの身に生じたことを報告し、そのついでに、その体験の記憶のために祈願や決意を記した紙片を衣服に縫い込んでであると話すのはきわめて自然な成り行きであろう。このことを避けるという意図には何らかの意味を認めなければならない。

この神の顕在の体験は非常に個人的なものであったことは明らかである。そうであったからこそパスカルは神に「汝」と呼びかけ、「われ」自らの決意や祈願を表明する。「正しき父よ、世は汝を認めざりしも、われは汝を認めたり」。「わが神よ、われを捨て給うや」。神と自らのつながりの個性・特権性への意識が顕著に表れている。パスカルの秘密主義は、ここでは自らの体験および決意の個人性を示している。このことは、積極的には、この体験や決意を自分だけに保存しておきたいという欲求(保存のための細心の工夫は先述した)、そして消極的には、この個人的な体験や決意がもつ神の真理性を人に伝達することは不可能だという事実への自覚あるいは諦念をうかがわせていると言えるだろう。

1654年11月23日の夜、パスカルはおそらくは自らの目前への神の顕現という体験を通じ、神の真理性をきわめて高い確実性をもって「感じ」た。彼はこの個人的な体験とそこから生じた決意を、自らのみに向けて保存すべく一つの文書を書き記す。この保存への配慮は、彼にとっての体験の希有な重要性そしてこの体験の一回性の認識を示し、それと同時に、《sentiment》によって得た確信の強さ、そしてその伝達不可能性への自覚を示すのである。

信仰は《raisonnement》によってではなく《sentiment》によって神から直接与えられるものであるという『護教論』での主張は、このようにパスカル本人が体験的に得た確信であった。しかしこの回心者の真情は、まさにそれが体験を経てのみ得られるものであるという事実によって、他者への伝達が決定的に拒まれている。アポロジーはこの事態の自覚のもとで試みられるのである。

結論

パスカルが『護教論』によって信仰の正当性を示そうとした相手は、あくまでも自らの理性的判断に信頼を置き、信仰をそれが理性に反するがゆえに拒む人々である。彼は一方では、宗教には預言や奇跡という証拠があると主張する。しかしこの主張は、証拠をそれと判断するためには前もって理性の「服従」あるいは「否認」を必要とすると述べられることから、信仰と理性との対立を真に解決したことにはならない。彼は他方で、人間の理性的判断では宗教の、したがって神の真理性を認識することができないことを主張する。パスカルのアポロジイの特色は、理性と信仰の矛盾を前提に信仰の正当性を説くこのような態度にこそ認めなければならない。彼によれば、信仰とは《sentiment》によって神が与えるものである。彼は、理性とは別の、さらに確実な認識を得る能力として人間の直観的なこの認識手段を引き合いに出し、それを通じて神の真実性を認識する可能性を示唆するのである。

しかしながら、このことによって果たされつつある護教論者パスカルの目的、すなわち、読者にむけて信仰を正当化し、彼を回心へと導くという目的は、実際のところ、自ら回心者でもあったはずのパスカルの真情と齟齬を来していると言える。信仰と理性の絶対的な両立不可能と信仰の神からの受動性を確信する回心者の真情にしたがうかぎり、弁論という、それ自体相手の理性に訴えかけることを前提とする行為、しかも人間の行為によって信仰を与えるという意図は成立しえないからである。こうしてパスカルは、『護教論』の執筆に際して、護教論者としての策略を回心者のもつ真情から独立させる必要があったと考えられる。この書において彼が説得術としてのレトリックを使用する正当性も、この点にもとづいていたと言えるであろう。

人間の理性は決定的に無力であり、それによつては認識しえない真理が確かに存在するという確信は、パスカルにとって自明のものであった。この確信を他人に伝達することにいかなる困難がつきまとうかを『パンセ』という作品は物語っているのである。

注

- 0) 本稿は、1992年12月に東京大学大学院総合文化研究科に提出された修士論文「パスカル『キリスト教護教論』における《sentiment》の意義——《理性》の無力さ」の概要である。1993年4月3日に行われたパスカル研究会第93回例会（東京大学・本郷）での口頭発表の後、若干の加筆訂正を施した。その席上、東京大学の塩川徹也教授には特に重要なご指摘をいただいた。それによれば、パスカルにおいて信仰とは、ここでわれわれが主として問題にするような、神から《sentiment》によって人間に

与えられる直接的な認識であるばかりではなく、聖書や教会の權威を介して得られる言わば間接的な認識としての側面をももつ。きわめて正当かつ有益なこのご指摘を考慮して主題を再検討することは、しかし、次回以後の課題としたい。

さて、『パンセ』からの引用のセリエ新版(Pascal, *Pensées*, Philippe Sellier éd., Bordas, 1991)にしたがう。ただし、慣例にしたがって、断章番号はこの版によるもののほかにラフュマ版(1951)によるものを併記する。メナール全集版(Pascal, *Œuvres complètes*, Jean Mesnard éd., Desclée de Brouwer, 1964-1992, 4 vol.)は略号 MES で示す。なお、引用文中で用いた[]は、それで囲まれた部分が、1°パスカルの原稿で抹消された部分であること、2°引用者の補足であること(ただし、[……]は引用者による「中略」のこと)、のいずれかを示す。また、下線による強調はすべて引用者による。

[1]「理性」の無力さ

- 1) 例えば、以下のような表現に認められる。
 La justice et la vérité sont deux pointes si subtiles que nos instruments sont trop mousses pour y toucher exactement. (S78-L44)
 Nous sommes incapables et de vrai et de bien. (S62-L28)
 La vérité n'est pas de notre portée ni de notre gibier. (S164-L131)
 Notre impuissance d'arriver au bien par nos efforts. (S181-L148)
- 2) S111-L76.
- 3) S182-L149.
 Cf. tous les hommes sont corrompus et dans la disgrâce de Dieu, [qu'] ils sont tous abandonnés à leur sens et à leur propre esprit, (S694-L454)
- 4) Cf. S182-L149, S509-L616.
- 5) Cf. S29-L410, S514-L621.
- 6) Cf. S29-L410.
- 7) S78-L44.
- 8) S94-L60.
- 9) id.
- 10) S736-L491.
- 11) Cf. L78-L44.
- 12) 〈raison〉 : André Lalande, *Vocabulaire de la philosophie*, PUF, 1991, 2 vol.
- 13) S144-L112.
- 14) S424-L837.
- 15) S142-L110.
- 16) Pascal, *De l'Esprit géométrique*, MES III, p. 391.
- 17) *ibid.*, p. 393.
- 18) *ibid.*, p. 395.
- 19) *ibid.*, p. 396.
- 20) *ibid.*, p. 402.
- 21) S142-L110.
- 22) Pascal, *De l'Esprit géométrique*, MES III, p. 403.
- 23) *ibid.*, p. 400.
- 24) *ibid.*, p. 391.

- 25) *ibid.*, pp. 413-414.
- 26) Pascal, *Préface sur le Traité du Vide*, MES II, p. 779.
- 27) *ibid.*, pp. 778-779.
- 28) さらに、『第18プロヴァンシアル』のなかにも、信仰と理性の対象とすることがらの違いが以下のよう語られている。
そうすると、われわれは諸事実についての真理を何によって知るのでありましょうか。神父様、それは目によってであります。目こそがそれについての正当な審判者であり、それは、自然的で理解可能なことがらについての審判者が理性であり、超自然的で啓示されたことがらについての審判者が信仰であるのと同様であります(Pascal, *Les Provinciales*, Louis Cognet et Gérard Ferreyrolles éd., Bordas, 1992, p. 374.)。
- 29) Gilberte Pascal, *La Vie de Pascal*, MES I, p. 578 et p. 609.
- 30) 17世紀における自然と超自然との識別の問題については、塩川徹也『パスカル—奇跡と表徴』(岩波書店, 1985) 第2章を参照。
- 31) Cf. Les principes se sentent, les propositions se concluent, et le tout avec certitude, quoique par différentes voies, et il est aussi inutile et aussi ridicule que la raison demande au cœur des preuves de ses premiers principes pour vouloir y consentir qu'il serait ridicule que le cœur demandât à la raison un sentiment de toutes les propositions qu'elle démontre pour vouloir les recevoir. (S142-L110)
- 32) S142-L110.
- 33) アンリ・グイエ教授は、この断章 S142 のなかに、「理性」と「心」の対立を、幾何学的領域と宗教的領域との二つの次元に求め、この両次元の間に「アナロジー」を指摘する。パスカルによれば、「理性」ではなく「心」によってはじめて到達される「証明不可能なもの」(l'indémontrable)がこの両次元にそれぞれ存在するが、実際のところ、そのそれぞれの間にはいかなる同一性も存在しない。というのは、幾何学的領域においては、「理性」と「心」の両方の認識原理が自然的次元にとどまる(すなわち、認識対象が自然的な認識に限られるということ)のに対して、宗教的領域においては、この両者のうち「心」のほうは超自然的な次元の認識を得ることができると規定されているのである(Cf. Henri Gouhier, *Blaise Pascal. Conversion et Apologétique*, Vrin, 1986, pp. 69-70 et al.)。

[2] 「キリスト教護教論」における〈sentiment〉の意義

- 34) Cf. 〈sentiment〉: Antoine Furetière, *Dictionnaire universel*, Nachdruck der Ausgabe Den Haag, édition en 1727; Georg Olms Verlag, 1972, 4 vol. 〈sentiment〉: André Lalande, *Vocabulaire de la philosophie*, PUF, 1991, 2 vol.
- 35) S661-L821.
- 36) Cf. S222-L190.
- 37) 〈sentiment〉は、信仰の領域だけではなく様々な領域において関わる重要な機能である。J・ラポルトは、その著『パスカルによる心と理性』の「心の領域」という章(第2章)(Jean Laporte, *Le Cœur et la raison selon Pascal*, Elzévir, 1950, Chapitre II: Le domaine du cœur)のなかで、理性ではなくて心に生じる判断や行為を、パスカルに即して5つの領域に認めている。そしてそのそれぞれにおいて、〈sentiment〉というはたらきが深く関与しているのを見いだす。その5つの領域とは、ラポルトによる小項目の表題で言えば、(1)「信仰」、(2)「繊細の精神」、(3)「道徳的意識」、(4)「美的感覚」、(5)「科学における直観」である。ラポルトは、それぞれの領域において〈sentiment〉がいかに関与しているのかについて簡潔に分析しているが、ここではそれを敷衍することは避けたい。ここで

は、関心を《sentiment》の信仰の領域におよぼす意義に限って考察する。

なお、ラポルトは「心」と《sentiment》をさほどはっきりとは区別していない。実際、パスカルも理性やそれが行う機能の対立語として、両者を明確な区別なしに用いていると思われる。ただ、J・モレルが、「パスカルは《sentiment》を《心》という特権的な能力を行使することだとしているようだ」(Jacques Morel, *Réflexions sur le 《sentiment》 pascalien*, in *Revue des Sciences humaines*, 1960, p. 23)と言うように、「心」よりも《sentiment》の方に、より強く機能あるいは活動・作用としての側面を認めることは可能である。われわれは、後にも確認するように、《sentiment》を「心」という能力ないし器官(部位)のもつはたらきであるとひとまずは理解しておきたい。

- 38) この点については、修士論文の第2章第2節で詳しく論じた。理性との適合性を根拠にキリスト教を正当化しようとする態度は、主に(セリエ版にしたがえば)、[XIV] *Soumission et usage de la raison, en quoi consiste le vrai christianisme* および[XV] *Excellence de cette manière de prouver Dieu* の両単位に見いだされる。また、次の断章をも参照。

Les hommes ont mépris pour la religion, ils en ont heine et peur qu'elle soit vraie. Pour guérir cela il faut commencer par montrer que la religion n'est point contraire à la raison. (S46-L12)

- 39) S142-L110.
40) S414-L382.
41) Cf. S323-L219.
42) S412-L380.
43) S680-L423.
44) id.

Cf. Quand un discours naturel peint une passion ou un effet, on trouve dans soi-même la vérité de ce qu'on entend, laquelle on ne savait pas qu'elle y fût, de sorte qu'on est porté à aimer celui qui nous la fait sentir, car il ne nous a point fait montre de son bien, mais du nôtre. Et ainsi ce bien fait nous le rend aimable, outre que cette communauté d'intelligence que nous avons avec lui incline nécessairement le cœur à l'aimer. (S536-L652)

- 45) S680-L423.
46) グイエ教授は、回心と「心」との関係性を詳しく考察している(Henri Gouhier, *Blaise Pascal. Conversion et Apologétique*, Vrin, 1986, p. 54-59)。教授は、パスカルも引用する聖書の語句《*Inclina cor meum Deus in ...*》から、「心」がそもそも宗教的な意味合いを含むものであることを指摘し、「心」が聖なる感情がはたらく特権的な場所であると見る。「心は、理性や感覚によらないで、たましいを神の方に差し向け、そして神ではないすべてのことがらからそれを遠ざける動きを、神その人から受け取る魂の部分である」(*ibid.* p. 55)。こうして、真の回心は「心」によらなければならない。自然的な状態では自己への愛に捕らわれてしまうたましいに超自然的なるものの介入をしるしづけるものが「心」という語なのである。こうして、「心」という語が「護教論」に登場するのはきわめて当然のことなのであるが、グイエ教授は同時に、この語を使用することにおいて示唆される護教的行為の効果の限界についても注意を喚起する。「心」という語が、神によって促されたたましいのはたらきについて語るのに適した語である以上、回心が神のはたきかけを必要とすることを強調し正当化することになるが、その一方で、人間的な行為である護教論の試みが「真の回心」を生じさせることはできないからである。この問題意識は本稿の次節(第2章第3節)での関心ときわめてよく重なる。
47) Cf. *Commentaire du manuscrit de l'Abbé Périer et Commentaire du P. Guerrier, MES III*, pp. 55-56.

紙片の内容と数日後に写し取られたと見られる羊皮紙の内容とは微妙に異なるが、その羊皮紙の内

容をルイ・ペリエが筆写したテキストで引用しておく (Cf. *MES III*, p. 51).

L'an de grâce 1654.

Lundi 23^e nov^{bre} jour de S^t Clément

pape et m. et autres au martyrologe romain

Veille de S^t Chrysogone martyr et autres etc.

Depuis environ dix heures et demie du soir

jusques environ minuit et demi.

FEU

Dieu d'Abraham, Dieu d'Isaac, Dieu de Jacob,
non des philosophes et savants.

Certitude, joie, certitude, sentiment, vue, joie

Dieu de Jésus-Christ.

Deum meum et Deum vestrum. Jean, 20, 17.

Ton Dieu sera mon Dieu. Ruth.

Oubli du monde et de tout hormi DIEU.

Il ne se trouve que par les voies enseignées
dans l'Evangile. *Grandeur* de l'âme humaine.

Père juste, le monde ne t'a point

connu, mais je t'ai connu. Jean, 17.

Joie, Joie, Joie et pleurs de joie. _____

Je m'en suis séparé. _____

Dereliquerunt me fontem. _____

Mon Dieu, me quitterez-vous? _____

Que je n'en sois pas séparé éternellement.

Cette est la vie éternelle qu'ils te connaissent
seul vrai Dieu et celui que tu as envoyé

Jésus-Christ _____

Jésus-Christ _____

Je l'ai fui, renoncé, crucifié. Je m'en suis séparé.

Que je n'en sois jamais séparé! _____

Il ne se conserve que par les voies enseignées
dans l'Evangile.

Renonciation totale et douce. _____

Soumission totale à Jésus-Christ et à mon directeur.

Eternellem^t en joie pour un jour d'exercice sur la terre.

Non obliviscar sermones tuos. Amen.

48) Cf. *MES III*, pp. 32-46.

[付記] 本稿は、文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。